

思 い 出

染井コートのお思い出

中 島 正 樹

僕は「三菱のテニス」などとえらそうに口を利く資格は全くない。それほどテニスは下手だ。しかし入社以来三十年、いつの間にか三菱のテニスの仲間との交友が深まり、マニヤの一人として、顔だけは知られて来たようだ。なにか書けと云われても、輝かしい思い出など何一つなく、全く閉口だ。

僕は学生時代陸上競技の選手だったが、これは今でも後悔している。長持ちのきかないスポーツの上、随分苦しく、よい記録でも出ない限り苦闘の連続で、一打一球に楽しみを持てるテニスにくらべると面白味のうすいスポーツだった。三菱に入っても早速「エム・ビー・シー」の対抗陸上競技の選手に引っぱり出され、運動会の前になると先輩に駆り出されて、染井のグラウンドで練習をやった。そのおかげか記録は忘れたが、僕のジャンプのレコードは長くオール三菱記録だったことを覚えている。

その頃の思い出だ。染井の倶楽部の集會室でユニフォームに着換えている時、ボンボンと銀杏の木立にこだまするさわやかな硬球の音を聞くに無性にテニスがやりたくなった。大学時代シーズンオフに始めたテニスが面白くなりだしたせいもあったろう。その上、当時私の係長が庭球同好会の長老で昨年亡くなられた向井輝志さんだったが、その御相手もさせていたかどうかというわけで、陸上競技の練習が終ってから、また着換えて下手なテニスに熱中した。当時は銀行の野村さんや、地所の大淵さんの剛球や魔球がコートを圧していた。

染井倶楽部の集會室では時々懇親会があった。その広間の欄間に、岩崎初代社長の宴会訓示のお言葉がかかって居たのを覚えていた。たまたまこの原稿を頼まれた時、その額がどうなっているか気にかかり、先日染井の養和会へ出かけて行った。養和会は昔とすっかり調子がちがってしまつて居たが、その額は随分痛んではいたものの、そして以前の広間ではなかったが、別の部屋にかかつて居り、久し振りでそれを仰いで懐旧の思い深いものがあつた。

この額は明治十三年四月、岩崎弥太郎社長から御示達された「公会式目」を書いたものである。その内容は今の我々にもなかなか範とすべきものが多いのでここに掲げたい。

公会式目

一、毎年春秋の両季を以て酒を親睦園に置き社員を會するものは半生の勞を慰し同社の親睦

を結はしめんと欲するなり互に礼讓を守り務めて和樂を主とし人に敬を失する勿れ自ら咎を招く勿れ

一、酒を置くは飲を尽すに止まり専ら儉素を要す二汁五菜に過ぐへからず

一、歌妓を召すは酒を行ふに止る猥褻の具となす勿れ放歌狂吟人の飲を破る勿れ

一、飲酒は量られし各其量を尽すを以て度となし人に酒を強ゆる勿れ乱に及ぶ勿れ

一、集散は時を以てし時に後れて會し時に後れて散する勿れ

右之条々我社公会の式目となし社員に示すもの也

この式目が制定されてから星霜八十余年、三菱の社員が紳士として高く評価される様になつた淵源の一つもこんなところにあつたのではないかと思われる。この式目の条々の通りに皆んなが宴會したとも断言しかねるけれども、三菱社風の育成には大いに力あつたと思われし、特に庭球関係者の集りは、この式目から採点しても可成り高い点を探つて来たのではないかと思ふ。

その額は養和会の寮の世話をしている人の話によると、戦時中どこかにしまわれてすっかり忘れられていたのが、近年いろいろの人達の強い望みから探しあてたものだそうである。新しい養和會館でも若し出来ることになったら、是非その大広間に掲げて貰いたいものだと思つてゐる。